

# CAMD 報告会

(Center for Development of Advanced Medicine for Dementia)

## 画像バイオマーカーで見た認知症：病態と診断

脳機能画像診断開発部 分子画像開発室

**加藤 隆司** 室長

2019年11月14日(木) 16時00分～

第1研究棟2階大会議室

変性性認知症のバイオマーカーには、液性と画像とがあり、NIA-AAの研究クライテリアでは、それをAT(N)の3つにわけている。このそれぞれとその組み合わせのフレームワークの中で、病態解析、鑑別診断の研究が進められていくと思われる。

アミロイドPETに関する関心の一つは、アミロイド集積が始まる最初期を検出することにある。アミロイドPETでは、限局性の高集積を経験することがあるが、その意義に関しては、十分に検討されているとは言えない。当研究グループの岡田らは、J-ADNIのアミロイドPET、脳脊髄液バイオマーカーのデータを用いて、限局性のアミロイド集積を示す認知機能正常群が、アミロイド集積陰性とアミロイド集積陽性の中間的な特性を持つことを示し、アミロイド集積陰性の認知機能正常者より、アルツハイマー病進行のリスクが高いことを示した。

当センターで行っているMULNIAD (Multi-modal neuroimaging of Alzheimer's disease)とSAT (Study on dementia with Amyloid and Tau PET)では、MRI、脳糖代謝FDG-PET、PiBアミロイドPET、THK-5351タウ/アストログリオシスPETを用いて、AD continuumの病態解析研究を進めてきた。その一つの結果として、脳の領域ごとに、PiB集積とTHK-5351集積との間に相関が認められ、偽相関ではなくなんらかの病態的意味がある可能性がある。また、鑑別診断では、画像バイオマーカーにより診断が明確になる場合と、かえって診断が困難になる場合とが認められた。これらの知見を通じて、今後の研究の方向性を議論したい。